紅雨（あめ）ノ鬼

1

舞台を取り囲むように、椅子が並び、人々が座っている。
舞台中央のスクエアに、一人立ち尽くす、オニの姿。

人　だれかが言った。
人　お前は何にでもなれるのだと。
人　無限の可能性があるのだと。
人　だれもが望む、素晴らしい夢。
人　それに向かって努力をしよう。
人　きっと素晴らしい人生が待っているのだから。

オニ　オニはかすかに空を見上げる。

子供の頃、自分には夢があった。この町には、空がない。真っ白い壁に囲まれた、閉じ込められた町の上には、いつもどんよりとした雲がかかっている。この町には、空がない。いつか俺は、空が見たいと思っていた。

刺殺音――

刑事　その日、一人の女が死んだ。

裁判所。
オニを取り囲むように、無数の人たちの姿がある。
その輪から離れ、一人、オニを見つめている刑事の姿――。

人　あなたは、この町の住人である、一人の女性を殺害。その場で逮捕されました。
人　そしてそれまでに起こった、七件の殺人事件についても関与を疑われています。
人　まず初めに聞きます。あなたは、
全員　オニですか？

刑事　この町には、オニと呼ばれる者たちがいる。彼らがどこから来たのか、なぜ生まれたのか、知る者はいない。

人　診断結果は、身分証に記載されているはずです。
人　答えてください。あなたは、オニですか？

刑事　彼らには心がない。人の言う、感情と呼ばれる何ものも持ってはいない。人々は理解できない彼らを恐れ、隔離した。

人　人を殺したオニの処罰は知っていますね。
オニ　……。
人　あなたは、あなたの犯した罪を、正直に語るべきです。
人　例えこの先、あなたの辿る運命が変わらなくても…
人　少なくとも、最後の時、人らしくいることができるでしょう。

間

人　あなたの賢明な判断に期待します。

重たい牢の扉が閉まる音が響く。

裁判所の一室。
荒々しい足取りで、裁判官が入ってくる。
少し遅れて、刑務官が入ってきて、片隅に控える。

裁判官　いいえ、お断りします。
刑事　しかし…！
裁判官　オニが境界を越え、ヒトの世界に入り込んだということだけで、十分処罰に値するんですよ。ましてあのオニは、人を殺しているんです。到底許されることではありません。
刑事　それは分かっています。ただ…
裁判官　ただ、なんです。
刑事　今回の事件にあたっては、ろくな捜査も行われていません。本人の自白と、わずかな証言があるだけです。彼の仕業だと決めつけるのは早計です。
裁判官　決めつける。

裁判官は、刑事を厳しく睨みつける。

裁判官　それでは、あのオニは誰かをかばって自白したとでも？ 何のために？
刑事　いえ、それはまだ…。
裁判官　あれはオニです。オニが人を殺すのに、理由はいりません。人が死に、そこにオニがいた。それだけで十分です。
刑事　……。
裁判官　仕事に戻りなさい。本来の、人を守る仕事に。

裁判官は、そう言うと足早に部屋を出ていく。
刑務官も刑事に一礼し、立ち去ろうとする。

刑事　あの…！
刑務官　……。
刑事　ご迷惑だとは分かっています。でもせめて話を…彼と話をさせてください。
刑務官　話。
刑事　別に彼をかばいたいわけではありません。ただ…知りたいんです。なぜ、彼があの女性を殺さなければならなかったのか。
刑務官　今さら、裁判を止めることはできません。あなたが何を言おうと、まもなく鬼は死刑を宣告されるでしょう。
刑事　はい。
刑務官　時間を無駄にするだけです。人はオニを理解できません。
刑事　分かっています。

刑事は、少し言葉を切って、

刑事　…それでも、努力は必要だと思っています。

一時、刑務官は刑事を見つめる。

刑務官　…私にそれを止める権利はありません。ですが…さしたる時間はありませんよ。
刑事　はい。

刑務官は、静かに立ち去る。

牢獄。
一人座り込んでいるオニの前に、刑事がやってくる。

刑事　久しぶりですね。
オニ　……。
刑事　いかがですか。
オニ　……。
刑事　あれっきり、何も話さないそうで。
オニ　……。
刑事　いえ、別にそれはあなたの自由ですが…。もし、あなたが犯人じゃないなら、それはちょっと困ったことになるんです。
オニ　……。
刑事　人を八人も殺すバケモノを、放置することになりますから。

風の音――
刑事は、カバンから何かを取り出すと、オニに差し出す。

刑事　…これを。

オニは、それを見ると、わずかに反応を見せる。

刑事　最後の殺害現場に残されていたものです。
オニ　……。
刑事　たぶん、あなたに必要なんじゃないかと思って、持ってきました。

オニは、それを受け取ると、しばらくじっと見て、

オニ　知ってるか？
刑事　なにを。
オニ　オニは、人を喰うと人間になれるらしい。
刑事　それが彼女を殺した理由ですか？

間

刑事　話してください。
オニ　……。
刑事　私は知りたいんです。

間

オニ　あの日は、ひどい雨だった。オレは何をするでもなく、ただ歩いていて、冷たい雨が身体を流れ、頭の先からつま先へ、全身を洗うのを感じていた。

女、スクエアに出てくる。

オニ　そこに、あいつがいた。同じように、ずぶ濡れで、まるで空き箱に捨てられた獣のように、その心の内に、小さな命を抱えて…。そして言ったんだ。

女　人を一人、殺してくれる？

2

市街地

町の人たちが楽しげに話しているところに、女とオニがやってくる。

女　いい？あなたがオニだってことは、絶対に知られちゃダメよ。はーい、皆さん、こんにちはー！

人々は噂話の真っ最中である。

A　ねえ、知ってる？

B　うそ！

C　マジで！？

B　ヤダー！

C　うける！

人々、大笑いしたかと思うと、同意を求めるように一斉に女たちの方を見る。

人々　ね？

オニはどうしていいか分からず、戸惑っている。

女　…なにやってんの。

オニ　え？

女　笑うの。

オニ　え？

女　わ、ら、う、の！

オニ、引きつった笑い顔を見せる。

それを見て、満足げに笑う人々。

A　そういえばさ、

B　うっそ…

C　なにそれ。ひどい！

B　大丈夫？

C　あり得ない…。

人々　今度は泣き出す人々。

A　ね？

オニ、泣くフリをする。

A　それに実は…

B　うっそ！
C　なにそれ！マジで！？
B　ひどい！
C　あり得ない！

人々、今度は怒る。

オニ　ガー！

オニ、何かしようと焦って、ヘンなことになる。

C　だれ？
女　気にしないで。ちょっと変わってるの。
C　ちょっとっていうか…。

そこに、警備隊がやってくる。

隊長　よーし、そこまでだ。（オニに）そこのお前、そのまま動くんじゃないぞ。
町の人たち　ご苦労さまでーす！

オニ、へんなことになったままで、

オニ　…だれ？
女　警備隊よ。オニを捕まえる人たち。

警備隊、ヘンなことになってるオニを取り囲む。

隊長　こいつは何だ。
下っぱ　分かりません！
副長　（殴る）バカヤロウ！分からないですむか！調べろ！
下っぱ　はい！

下っぱ、オニをぐるぐると眺めつつ、調べ始める。

隊長　居住区からオニが一人、許可なく抜け出したとの報告があった。
町の人たち　え！？

女、警備隊の言葉に緊張する。

B　……？

Bはその様子に気づき、女を見る。
一方で警備隊は何も気づかず、話し続けている。

隊長　人かオニかは、見た目では分からん。どこに潜んでいるとも限らんから、十分注意するように。
町の人たち　はーい。
隊長　で、分かったか！
下っぱ　分かりませんでした！
隊長　（殴る）バカヤロウ！キサマ、何年この仕事をやってんだ！

下っぱ　すいません！
隊長　フン…こいつの目はごまかせても、俺の目はごまかされんぞ。こいつは…バカだ。
全員　バカ！？
隊長　そうだ、バカだ！この間の抜けた顔をよく見てみろ。バカの特徴をすべて兼ね備えている。
全員　あー…（納得）
隊長　お前もこうならないように気をつけることだ。
下っぱ　はい、隊長！
隊長　報告！
下っぱ　報告！
副長　市街地にて、バカ一名を発見。伝染の可能性があるため、近隣住民は十分に注意されたし。以上！
下っぱ　はっ！
隊長　それでは、皆さん。今日も一日安全にお過ごしください。行くぞ！

警備隊、去っていく。

女　…もういいわよ。

ようやく自由になり、ヘタリ込むオニ。

A　相変わらずだわ～あの人たち。
B　でもオニがこっちに来たって。
C　怖いよねえ…。
オニ　……。
A　さて、と。オニに喰われる前に帰るかなーっと。
C　ねえ、いつものとこ、寄ってく？
A　ごめん、今日パス。
C　えー、付き合い悪い。
A　しょうがないじゃん。

そう言って、帰り始める人々。
その中で、Bだけが何か言いたげに女を見ている。

B　…ねえ。
女　なに？

女は、これ以上話したくない、というように、わずかに語調を強める。
Bはそれを察して、首を振る。

B　…ううん、別に。
A　（遠くから）行くよー。
B　あ、待って！

人々、去っていく。

オニ　…ふーん。
女　なに？
オニ　人間って、こんな感じなんだな、と思って。
女　…どうだった？

オニ　なにが？
女　人間。
オニ　疲れるね。
女　……。
オニ　俺たちは、他のやつとはあまり関わらないから。
女　そうね。

間

女　すごく疲れる。
オニ　……。
女　上辺では仲良くしてても、裏ではなにを考えてるかわからない。上っ面だけの付き合い。
オニ　……。
女　いつでも気分で裏切れる存在。その程度のものだから。
オニ　ふーん…。

オニは、それには興味を示さず、

オニ　で、だれを殺したいの？
女　……。
オニ　殺したいんでしょ？
女　まだはっきりしないんだよね。あの中のだれが犯人か。
オニ　犯人？

女は、記憶を辿るように、ゆっくりと話し出す。
記憶の中の幼馴染が、スクエアに出てくる。

女　私には、友達がいた。子供の頃から、ずっと一緒に育った幼馴染。
幼馴染　おはよう。…元気？
女　まるで家族みたいに…家族以上に、なんでも話せる相手。彼女のいない人生なんて、考えられなかった。

幼馴染は、かつてそうであったように、女に寄り添い、立つ。
そしてポケットから取り出したものを、女に差し出す。

幼馴染　ねえ、これ…あげる。
女　あの日まで…。
幼馴染　お守り。

それは、刑事がオニに渡した遺留品である。

女　一年前のあの日、彼女は死んだ。殺されたの。何もしていないのに、ある日突然「あいつはオニだ」と疑いをかけられて。

人々、スクエアに出てきて、幼馴染を取り囲んで行く。

女　その噂に追い詰められた彼女は、自ら命を絶った。

人々の輪の中に飲み込まれるように、幼馴染の姿は消えていく。

オニ　……。
女　一年間…私はどうしていいか分からなかった。どうにもならない怒りを抱えたまま、ただ日々を生きてきた。そんな時…私はあんたを見つけた。そして決めたんだ。
オニ　殺そうって？

女は、オニの言葉に苛立ちを感じて、オニを睨みつける。

女　まさか、怖気付いたわけじゃないでしょ？あんた、オニだもんね。どうせ人間の心なんか持ってないんだから、だれだって殺せるでしょ。違う？

オニは、しばらく女を見ている。
やがて、何気ない口調で、

オニ　別に、いいよ。
女　……。
オニ　やるよ。

間

女　そう。
オニ　……。
女　ならよかった。
オニ　…それから、俺たちの奇妙な生活が始まった。

3

牢獄
再び、刑事と向き合っているオニ。

刑事　…それから。
オニ　俺は人として暮らし始めた。人の生活は慣れなかったが、面白いこともあった。
刑事　面白いこと。
オニ　他人のことを考えると言うことが、ほんの少し分かった気がした。

別のところに、女。
そして、それを遠くから見ているBの姿がある。

女　オニに心はなかった。私たちが何をしようと、何も感じない。でもそのことが…それはとても不思議なことだったのだけど、そのことが私を少し落ち着かせてくれました。
刑事　落ち着かせた。
オニ　あいつはそう言った。何も感じないでいてくれるのは心が楽だ、と。
刑事　……。
女　あいつは「なぜ？」って聞かない。同情もしない。怒りもしない。疑いもしない。私の言うことを、ただそのままに受け止め、受け入れた。そのままに、ありのままに、受け入れてくれた。
刑事　なぜ、彼女の頼みを聞こうと思ったんです？
オニ　…さあな。

刑事　……。
オニ　人の真似事をしてみたかったのかもな。

間

刑事　犯人は見つかりましたか。
オニ　……。
刑事　噂を流した。

沈黙――
やがてゆっくりと、オニは刑事を見る。

女　…私たちがどれほど探しても、話を聞いても、だれが噂を流した犯人かは分からなかった。だれもがだれかに聞いて、だれもがだれかにしゃべった。そこには噂だけがあって、流した人間はいなかった。そうして、時間だけが過ぎていった。

4

スクエアの中央に女。
そこから少し離れたところに、オニ。
女を遠巻きに見ながら、囁き合う人々の姿がある。
その中で、会話を先導するA。

A　ねえ、聞いた？
人　聞いた。
人　あの子が、
人　オニの話を。
A　聞き回ってる。
人　あちこちで。
人　誰彼構わず。
人　聞き回ってる。
A　どうしてかな？
人　どうしてなの。
人　なんで、
人　なんで、
A　いったい何のために、
人　もしかして、
人　もしかして、
人　もしかして、
人々　あの子もオニ？

オニの前に、半オニが現れる。

半オニ　おい。
オニ　なんだ、お前…？
半オニ　ちょっといいか？

一方で、女の元にBがやってくる。

B　…ねえ。
女　なに？
B　ちょっといい？

オニと半オニ――

半オニ　お前、オニだろ。
オニ　……。
半オニ　なんで人に関わる。
オニ　別に。
半オニ　覚悟がないならやめとけ。
オニ　覚悟？
半オニ　ああ。
オニ　なんの覚悟だ。
半オニ　人を死なせる覚悟だ。
オニ　死なせる？
半オニ　そうだ。
オニ　俺は、人を殺してくれと頼まれた。だから来ている。今さら、言われるまでもない。
半オニ　殺すのは勝手だ。好きにしろ。でも死なせるのは違う。
オニ　違う？
半オニ　さっさとオニの住処に帰れ。
オニ　……。
半オニ　オニは人にはなれねえよ。

半オニ、去る。

オニ　……。

女とB――

B　仲良いんだね。
女　……。
B　あの彼と。
女　別に…。
B　良かったな、って思ってるの。あのことがあってから、みんなと距離を置いてるようだったから。
女　……。
B　友達ができたなら、良かったなって…。
女　……。

Bは何かを女に言おうとするが、口にできない。

B　…大丈夫？
女　何が？
B　何っていうか、その…。

沈黙――

そのBの態度に、女は何か不穏なものを感じる。

女　ねえ、なに？ 何かあるなら言ってよ。

B　あの…。

そこに、Cがやって来る。

C　ねえ、見つけたよ。心当たりがあるって人。

女　……！

C　案内してあげる。

女、オニを振り返る。

女　行こう。

5

河口のあばら家――

そこに待っていたのは、A。

女はあばら家に入り、オニは外に座り込む。

オニ　そこは、大きな川の河口近くにある、古びたあばら屋だった。あいつは中に入り、俺は外で待った。

A　来たわね。

女　教えて。だれがやったの。

オニ　その時、俺は奇妙なことに気づいた。小屋の周りに、たくさんの人の気配があった。

A　なんの話。

女　何って…教えてくれるんでしょう？ だれが彼女を殺したのか。

A　なんでそんなこと知りたいの？ 相手はオニよ。

女　違う。

A　オニだった。

女　違う。だれかが嘘をついて、殺したのよ。流した嘘よ。彼女は私の親友だった。オニのはずがない。

A　親友。

女　そうよ。

笑い声――

人　オニだね。

女　え…。

人　オニだ。

人　やっぱりオニだ。

人　親友だって。

人　あいつと同じ。

女　ちょっと待って。

人　どうする？

人　どうする？

人　どうしよっか？

人　どうしたらいい？

A、笑う。

A　決まってるでしょう？

人々、女を取り囲んでいく。

オニ　…おい！

オニ、女の元に駆け寄ると、かばうように立つ。
警備隊、スクエアの外に立ち、人々に告知する。

隊長　昨日、街で一件の殺人事件が起こりました。オニの関与が疑われています。町でオニらしきもの見かけた人は、直ちに警備隊に連絡してください。

女　殺人…？

女、ハッとしてAを睨みつける。

女　…あなたがやったの？
A　何を？
女　あなたが噂を流したの？
A　さあ。
女　とぼけないで！
A　だれかが言った。だれかに聞いた。私じゃないし、あの子でもない。だれかが言ったの。私じゃない、だれかが。
女　……。
A　…でもそれって大事なこと？だってほら、おかげでみんな幸せ。私たちは間違ってない。

隊長　教えてください。オニはどこですか？

人々は、女とオニ、どちらともなく指差す。

A　ねえ、教えて？
女　え…？
A　オニは、どっち？
女　……！
A　あなたと、その彼…オニは、どっち？

女は、答えられない。

オニ　……。

長い沈黙の後――
やがて女の手がゆっくりと上がり、オニを指差そうとする。
B、女をかばうように輪の中から出てくる。

B　待って！
女　……！
A　なに？
B　違うよ、違う…。彼女はオニじゃない。
A　……。
B　二人とも、違う。

Bは女を振り返る。

女 B …ね？

……。

Bは再び人々に向かって、

B ねえ、本当はみんな、分かってるんでしょう？ 私たちの中にオニなんかいない。

だって、ずっと一緒に生きてきたじゃない。この町で、みんな一緒に。それなのに、

急にオニだなんて…そんなこと、あるわけないじゃない。

……。

A ここにオニなんかいない。ここにも、どこにも。

B ……。

A ねえ、もうやめよう？ お願いだから…。

B

人々、冷めたような目でBを見ている。

A なんでそんなこと言うの？

B え？

A なんでオニをかばうの？

B …え？

人 なんで？

人 なんで？

人 なんで？

人 なんで？

A なんで？

B

A

B

A

女 A …どういうこと。

A 何が。

女 A 私のこと、オニにしたかったんでしょ？

A 別に。だれでもいいの。そうすれば、人でいられるもの。

女 A ……！

A あなただって、そうでしょう？

人々、今度はBを取り囲んでいく。

A ちょっと待ってよ…ねえ…ねえ！

B あ、そっか。二人は、仲良かったもんね。その友達がオニだなんて、私だって信じ

A たくない。みんなだってそうでしょう？ だから…彼女はきっと悪くない。

B 私〝は〟…？

A 大丈夫、私はずっとそばにいるから。

B やめて…。

A だから、心配しないで。

B やめてよ！

BはCの手を振り払う。

警備隊の笛――

人々によってBは取り押さえられ、連れ去られる。

馬鹿ね。せっかくチャンスをあげたのに。

A、女を見る。
女、先ほど指差そうとした手を、反射的に隠す。

女　違う…私は違う…。
A　そう。
女　……。
A　だといいね。
女　……。
A　私はね、みんなに役目をあげてるだけ。ただ死んでいくだけの人生で、なんの役にも立たない私たちが、せめてひと時、満足するための役目を。だって、生きる意味のない人生なんて、辛くない？
女　それが、オニを殺すこと？
A　私は殺さない。そんなひどいことできない。ただ…

A、女を指差す。

女　オニを探すだけ。
A　……。
女　その日、その時のオニを。
A　……。
女　だれも疑わない。だれも逆らわない。だって逆らったら、自分がだれかわからなくなるから。私はオニがだれかなんか知らない。オニが何かも知らない。でもこれだけは知ってる。私はオニじゃない。
A　……。
女　あなたもオニじゃない。
A　……。
女　ねえ、思い出して。あの時、あなたは何をした？
A　え…？
女　あなたの親友が死んだ時、あなたは何をした？

スクエアに、幼馴染が出てくる。
幼馴染は、女に助けを求めるように、手を伸ばす。

A　何も。何ひとつ。
女　……。
A　だから、復讐したいんでしょう？　私は正しい人間なんだ、って証明したくて。
女　……。
A　別に、いいよ。私をオニにしても。

女、答えない。
A、肩をすくめ、立ち去ろうとする。
オニ、その前に立ちはだかる。

A　…なに？
オニ　人は、互いを愛するものだと聞いた。互いを愛し、慈しみあい、助け合うものだと聞いた。
A　そうだよ？　ちゃんとそうしてる。
オニ　……。
A　これはみんなのためだもの。（女に）…でしょ？

女、小さく首を振る。

女　違うよ…私は絶対に違う…。

女、Aに近づいていく。
同時にオニもAに迫っていく。
二人は、Aを捕まえると、もがくAを地面に押さえつける。

一時の間――
二人が離れた時、Aは死んでいる。

半オニ、出て来る。

半オニ　急げ…。
オニ　……。
半オニ　逃げろ…！

二人、逃げていく。

6

やがて二人は、町外れの丘の上にたどり着く。
ようやく息を吐きながら、二人は座り込む。

しばしの間――

オニ　なあ…。

女は、オニの言葉を遮るように、

女　あんたがやった…。
オニ　え…？
女　あんたが殺した。ねえ、そうでしょう？ あれは、あんたがやったのよね。あんたが、あいつを殺した。オニが、人を殺した。そうでしょう？

オニは、女を見つめている。

オニ　……。

女は、その視線から逃れるように、顔を背ける。

女　でもこれでよかったのよね。だって、あいつは人殺しだった。あんたも聞いたでしょ。あいつが、私の友達を殺したのよ。だから、これは正しいことだった。そうよ、あいつこそオニだった。人殺しのオニだったんだから。ねえ、そうでしょう？

オニ　……。
女　答えてよ…答えなさいよ！

間

オニ　ああ、そうだな。

間

オニ　その通りだ。

オニはいつもの通り、淡々と答える。
女は、まるで力尽きたように、

女　なんで…。

それ以上、言葉が続かない。

オニ　…行くか。ここにいても、捕まるだけだ。
女　……。
オニ　どうした。
女　もう終わったでしょ。全部。
オニ　……。
女　だからもう、一緒にいる必要はない。

オニは、意外そうに女を見て、

オニ　そうか。
女　……。
オニ　そういえばそうだったな。

オニは、少しの間考える。

オニ　お前はどうする。
女　さあ…。
オニ　……。
女　分からない。もう…何も分からなくなっちゃった…。

風の音――
女はポツリと呟くように、

女　ねえ、オニは人を喰ったら、ヒトになれるんでしょ？
オニ　……。
女　試してみる？

間

オニ　興味ないな。
女　そう。
オニ　人は疲れる。
女　そうだね。
オニ　ああ。

間

女　どうしたら、人はオニになれるのかな？

その時、再び風が吹き、二人はわずかに顔をしかめる。
その風に乗って、空から白いものが舞い降りてくる。

女　あ…。

女はふと、それを手に取る。

女　これ…。
オニ　花びら…？

女が辺りを見回すと、二人からほど近い斜面に、一本の桜の木があるのに気がつく。

女　サクラの花…。
オニ　サクラ…？

二人は、しばらくその花吹雪を見つめている。
幼馴染、出てきてその女を見つめている。

女　よく来たんだ、ここ…。あの子と一緒に…。子供の頃から、何度も…何度も…。
幼馴染　ねえ、あそぼう。
女　何度も…何度も…。
幼馴染　あそぼう。
女　何度も…何度も…何度も…！

幼馴染　私には、友達がいます。小さな頃から、ずっと一緒にいた、大切な友達です。その子といると、私はいつでも笑うことができます。私がどんな失敗をしても、怒っても、傷つけても、その子はいつも「大丈夫」って言ってくれます。だから私はいつも、前を向くことができます。それでも、どうしても辛くなった時には、あの丘に行きます。そこには一本のサクラの木があって、不思議なことに、いつだってきれいな花が咲いているのです。そこで私たちは心が空っぽになるまで、その花を見つめているのです。すると私たちは、また笑うことができます。そして私たちは言うのです。

幼馴染　幼馴染は、女を優しく見て、

幼馴染　ありがとう。
女　……。
幼馴染　また、明日。

幼馴染の姿は消えていく。

オニ　…きれいだな。
女　本当に…。世界って、本当にきれい…。

ひと時の静寂――

オニ　…行くか。

女　…ええ。

女、頷く。

7

人々の行き交う中を、二人は身を隠しながら進んでいく。

人　だれかが言った。
人　お前は何にでもなれるのだと。
人　無限の可能性があるのだと。
人　だれもが望む、素晴らしい夢。
人　それに向かって努力をしよう。
人　きっと素晴らしい人生が待っているのだから。
人　でも私は知っている。
人　それは嘘だということを。
人　遠いどこか別の世界の…〝だれか〟の物語に過ぎないということを。

その二人の姿を、刑事はじっと見つめている。

刑事　彼らは旅を続けました。どこまでもどこまでも、安住の地を目指して…。

時折、人々は二人の姿に気づく。
その度に、二人は彼らを手にかけていく。

人　将来の夢を聞かれました。でも私は、答えられませんでした。そうしたら、優しく
人　声をかけられました。「若いんだから、夢の一つや二つ、持たなくちゃ」
人　私の友達は、みんな素敵な人ばかりです。いつもどこでも輝いていて、そんな彼ら
人　のことをみんなが憧れています。だから私は、いつでも笑っています。
人　世の中には、不幸な人たちがたくさんいます。でも私には暮らす家があり、食べる
人　ものにも着るものにも苦労したことがありません。これを幸福と呼ぶのだと、私は
人　教えられました。
人　でも…。

二人の足取りは次第に重く、苦しくなっていく。

刑事　春は夏になり、秋の終わりになっても、それは見つかりませんでした。

人　なのに、死にたい。
人　なのに、消えたい。
人　そんな私が嫌い。
人　そんなワガママを言っている自分が大嫌い。

やがて二人は、別々に座り込む。

人々　この町には、空がない。真っ白い壁に囲まれた、閉じ込められた町の上には、いつもどんよりとした雲がかかっている。この町には、空がない。私はいつか、空を見たいと思っていた。

8

町の果て、巨大な門扉がそびえ立つ所。
疲れ果て、座り込む女の前に、Bが現れる。

女　あ…。
B　…久しぶり。

女は逃げなければと思いながらも、体が動かない。

女　どうしてここに…？
B　探してたの。
女　え？
B　二人を。

Bは油断なく女と、その周囲を気にしながら、

B　噂になってるわよ。二人組のオニが、あちこちで人を殺してるって。
女　……。
B　信じられなかった。だってそうでしょう？ 私がかばったのは、結局オニだったんだって…そんなこと、思いたくなかったから。

そう言って、女を睨みつけるB。
女は、疲れたように目を伏せる。

女　…何の用？

Bは、決然と、

B　オニを渡して。
女　……！
B　最初っから気づいてた。あの男はオニだって。でも、警備隊に突き出すような真似はしたくなかったから…。
女　……。
B　それに…あなたが変わっていくのを見てたから。
女　……。
B　彼が来てから、あなたは少しずつ、昔を取り戻していった。あの子が死んでから、ずっと心を閉ざしてたあなたが…。だから、このままあなたが幸せになってくれるなら、それでもいいってそう思った。それなのに…。
女　……。
B　今のあなたは、ただの人殺し。そんなの許せない。

Bは、覚悟を決めたように、女に近づいていく。

B　オニを渡して。イヤとは言わせない。あんたは見逃してあげるって言ってるんだから、十分でしょ。何が不満なの？
女　……。
B　迷ってる時間はないわよ。警備隊には通報してあるんだから。このままじゃ、全員捕まって終わりになる。さあ、オニを渡して。

視線を交わす二人。

オニは、別の場所からその様子を見つめている。

半オニ、出てくる。

半オニ　どうした。

オニ　……。

半オニ　殺さないのか。

オニ　……。

半オニ　あの女の言ったことは本当だ。もうすぐ、ここに警備隊が来る。放っておけば、捕まるだけだ。

オニは、じっと女を見ている。

オニ　なあ、俺がこいつを殺したら…。

半オニ　……。

オニ　あいつは喜んでくれるかな？

半オニ、まるでその問いを予想していたかのように、小さく息をつく。

半オニ　…それが関係あるのか？

オニ　さあ、分からない。

半オニ　……。

オニ　ただ、そんなことを考えただけだ。

オニは不思議そうに、自分の胸に手を当てる。

オニ　オニには心がない。人の言う、感情と呼ばれる何ものも持ってはいない。

半オニ　……。

オニ　でもな、あいつのため、この手を振るう度、俺の中で何かが叫ぶんだ。白い壁に囲まれて、閉じ込められた小さな牢獄の中から飛び出そうと、暴れ、もがき、苦しんでいるんだ。そしてその度、俺は…。

半オニ　……。

オニ　幸せを感じるんだ。

間

半オニ　…それが人間だ。

女、激しい痛みに耐えるかのように、ゆっくりと立ち上がると、微かな声で、

女　…ごめんなさい。

B　……！

女　本当に…。本当に、ごめんなさい…。

そして、よろよろと近寄ると、Bを抱きしめる。

オニ　そうか…。

半オニ　……。

オニ　そうなのか…。
半オニ　……。
オニ　これが人間か…。

B、崩れ落ちる。
女の手には、いつの間にかナイフが握られている。

半オニ　苦しいぞ。
オニ　……。
半オニ　ヒトになるのは。
オニ　……。
半オニ　所詮は、死に向かって歩くだけの人生…。何も感じず、何も考えず、人生に意味なんかないと思っていた方が、はるかに楽だ。
オニ　ああ。
半オニ　が、だれかの生を願う事は、生きることの意味を認めることだ。そうなれば、お前はもうオニではいられない。

女、泣き崩れる。

半オニ　逃れたければ、道は一つしかない。

オニ、女の元へ行こうとして、ふと半オニを振り返る。

オニ　あんたは…どっちを選んだ？
半オニ　選んでねえよ。
オニ　……。
半オニ　俺はハンパ者だ。

半オニ、去る。

刑事　冬の訪れを告げるように、空から雪が降り始めていました。その冷たい氷の綿毛は、立ち尽くす二人を優しく包み込むように、静かに、静かに、降り積もっていきました。この世のすべてを、白く覆い尽くすかのように。

オニ、女を見つめている。

刑事　二人の前には、扉がありました。この町と、外の世界を隔てる大きな扉。白い壁にただ一つ開けられた、外界への門。長く閉じられたまま、開けられることのなかったその門が…。

裁判官　裁判官、出てくる。
刑事　刑事と視線をかわすと、無言で立ち去ろうとする。

刑事　一つ、聞いてもいいですか。
裁判官　…なんです。
刑事　オニには心がない。あなたはそれを信じていますか？
裁判官　ええ。
刑事　なぜです。
裁判官　そういうものだからです。かつて、まだこの町に境界がなかった頃、彼らの暴力に多くの人々が犠牲になりました。共存不可能。それが人の出した結論でいた。

刑事　その歴史は知っています。私は、今現在の話をしています。
裁判官　……。
刑事　オニには心がない。私たちはそれを、あまりにも常識として受け入れてきました。私たちだけでなく、彼らさえも。でも私は、それは人の生み出した偏見だったのではないかと思っています。
裁判官　違います。それは全く違います。
刑事　……。
裁判官　あなたは今の言葉を、オニに家族を殺された遺族の前で言えますか？
刑事　……。
裁判官　オニは容易く人を傷つける。それは事実です。だからこそ、厳しく管理されなくてはならないのです。これが最善の方法なのです。
刑事　……。
裁判官　これ以上は、あなたの立場も危うくなりますよ。

裁判官、去る。

刑事　あなたはどう思いますか。
刑務官　…分かりません。ですが、仕事柄、常識は疑わないことにしています。
刑事　その方がいいですね。

刑務官は去りかけて、

刑務官　…あなたは、なぜこんなことを？
刑事　たぶん…ただのつまらない意地なんです。
刑務官　意地？
刑事　ええ。人を信じたいという…ちっぽけで、くだらない…意地なんです。

刑務官、一枚の書類を刑事に渡す。
刑事はそれを見ると、オニと女を静かに見つめる。

9

オニ　よう。
女　彼はそう、私に声をかけました。「大丈夫か？」
オニ　「うん」彼女は小さくうなずいた。こちらを見ない、そのままで。
女　寒いね。
オニ　ああ、雪が降ってきた。
女　もう冬になるんだね。
オニ　…早いな。
女　早いね。
オニ　上っ面だけの会話が、俺たちの間を通り過ぎて行った。
女　「春になったら…」彼はそう続けました。「またあの丘に行ってみよう。あの日、あのサクラの花を見た、あの場所へ」
オニ　「そうだね」彼女は答えた。でも本当は分かっていた。俺たちのどちらも、その言葉を信じていないことを。
女　きれいだろうなあ。
オニ　……。
女　きっと、今まで見てきたどの花よりも、ずっと…。

女は花びらを探そうとするように、手を伸ばす。

その上に、雪が次々舞い降りていく。

女　…本当は気づいてたんだ。彼女がずっと、助けを求めてたこと。ずっと、ずっと…私を見てたこと…。でも私は、彼女の伸ばす手を、すがる目を、かけようとするその言葉を…何度も何度もためらいながらも、吐き出したいその想いと、私を気遣う優しさとの間で引き裂かれながら絞り出したその声を…私はこの手で握りつぶした。……。

オニ　鬼は私だ。彼女を喰ったのは、私。自分の親友を、私は、殺しました。

女　女は、解き放たれたように、オニに向かって小さく笑う。

女　わかってた…。本当はずっと、わかってたんだ…。

オニは、困ったように首を傾げ、

オニ　こんな時…どんな顔をすればいい。人間っていうのは、こういう時、どんな顔をするものなんだ。

女　（笑う）さあ、私も分からないよ。

女、空を見上げる。

女　このまま、雪に埋もれて消えてしまえたら…全部なかったことにできるのかな…。

オニは、半オニの言葉を思い出す。

半オニ　逃れたければ、道は一つしかない。

女　ねえ、初めて出会った日…頼んだよね。人を一人殺して欲しいって。

オニ　（半オニに）…頼みがある。

女　その願い…今、聞いてもらえる？

女、ナイフを差し出す。

刑事　それで彼女を殺したのですか？

オニ　そうだ。

刑事　彼女の願い通りに。

オニ　そうだ。お前たちは見たはずだ。大量の血の跡と、凶器のナイフを。引き裂かれた服の残骸を。

刑事　……。

オニ　長い長い旅路の中で、あいつは疲れ切っていた。誰にも受け入れられず、どこにも居場所がない。何の意味もない日々を、ただ生きるためだけに生きる…。死ぬことが、ただ一つの救いだった。

刑事　遺体は。

オニ　……。

刑事　発見されていませんよ。

オニは、初めて刑事を振り返る。

オニ　喰った。

刑事　……。

オニ　俺は鬼だからな。残りは森に投げ捨てた。春になれば見つかるだろうさ。

刑事は小さく首を振ると、刑務官から受け取った書類を出す。

刑事　現場に残された血痕の調査結果です。現場にあった血痕はオニのものでした。もちろん、彼女が噂通りオニだったなら、問題はなかったでしょう。が、そうじゃない。彼女は人間だった。少なくとも、私はそう確信しています。だとすると、あの場で彼女は死んでいない。

オニ　……！

刑事　証人は一人しかいないんですよ。あなたが殺したのを見たと言っているのは。

刑事は半オニを指差す。

刑事　あなたは現場に自らの血をまき、彼に頼んで彼女の死を偽装した。

オニ、刑事を睨みつける。

オニ　何で俺がそんなことをする。

刑事　生きていて欲しかったからでしょう？

オニ　……。

刑事　彼女に。

オニ　……。

刑事　あなたに本当に心がないなら、初めからついていきませんよ。あなたと彼女が出会ったその日に、おそらく彼女は死んでいたでしょう。自らの人生に絶望して。が、あなたはそんな彼女を救った。なぜです。

ひと時の沈黙――

オニ　…同じだったからだ。

刑事　同じ。

オニ　あいつの心は、俺と同じ、カラッポだった。まるで空き箱に捨てられた獣のように、虚ろで、今にも消えそうな、小さな命を抱えて、あいつは雨に濡れていた。だから俺は、ついて行ったんだ。

刑事　……。

オニ　だけどな、日一日、過ぎるごとに、俺は怖くなった。共に過ごす違和感を、感じなくなることが怖かった。孤独が癒されることが怖かった。そうなれば、もう俺は独りに戻れなくなる。

刑事　……。

オニ　あいつに生きていて欲しかった？　確かにそうだ。だがあいつのためじゃない。自分のためだ。たとえ側にいなくても、俺のことを知ってる人間が、この世のどこかにいる。それだけでいい。それで十分だ。

遠くから、裁判官たちの声が響いてくる。

裁判官　皆さん、評決は決まりましたか？　それでは、答えてください。

人　有罪。

人　有罪。

人　有罪。

人　有罪。

裁判官　では被告人を、八件の殺人事件に対し、有罪とします。刑の日取りは追って連絡し

ます。以上。

刑務官が現れ、オニを連行していく。

刑事　最後に聞いてもいいですか。…あなたは、オニですか？

オニは足を止め、首を振る。

オニ　いいや。ヒトだ。俺はあいつを喰って、ヒトになったんだ。

オニは連れられていく。

刑事は、意を決したように、裁判官に声を掛ける。

刑事　一つ、提案があります。

10

女　人生に意味などないと思っていました。世の中なんて、変わらないと思っていました。でも私は、ただ一つ、願ってしまったのです。それは本当にちっぽけな願い事で、叶うあても、叶える意思も、その時の私にはありませんでした。でも、だれかの生を願った、その時に、その願いは鋭い刃となってこの身を切り裂き、私は私自身の心をむき出しにしてしまいました。そうして生まれ出た、その小さな心は、小さな命は、こう囁いていました。「前へ」

女　「未来へ」

刑事　その日、長く閉ざされていた、町の門が開かれました。そして、一人のオニが町から追放されました。そこに広がるのは果てしのない荒野で、人々は嘲るように言いました。「生きていけるはずがない」「数日持てばいい方だ」そうして門が閉じられた時にはもう、彼らのことなど誰も気にしていませんでした。

ですが、私は思うのです。たとえ彼らに残された日々がわずかであったとしても、彼らは今、自由だ。彼らを縛るものは何もない。それが幸福の道かは分かりませんが…少なくとも彼らは、自らの人生を自らの意思で歩むことができる。

刑事　私はそれを、羨ましく思うのです。

幕